向陽介護便り

平成22年5月　第49号

発行人:㈲向陽介護システムズ
新宿区東五軒町1－12　青木ビル
TEL　03-3267-2015

有馬稲子さんと徒然草

「つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかいひて、心に移りゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ」　これは、たいていの人が、高校時代に古典の授業で習う『徒然草』の序段です。鎌倉時代の後期、今から約７百年前吉田兼好によって書かれた随筆で『枕草子』と並んでわが国の随筆文学の双璧と称されています。

ただ、吉田兼好がこの「徒然草」を通し、何を表現し、何を後世に伝えようとしたのか、残念ながら、高校の授業では教えてもらえなかったのではと思います。文法的な解釈が中心で試験のためだけのものになっていたのでは？　勿論、教える側にも、教わる側にも、じっくりと読み下す時間的余裕がなかったのも一因とは思うのですが……。

序段と243段からなる「徒然草」で、吉田兼好は仏教的無常観にもとづいて自然、人生、社会の様々な事象を事由に書きとめています。　また、吉田兼好は「生・老・病・死」についても、何段かで取り上げています。（58段、74段、155段）

死期（しご）は序（ついで）でをまたず。死は、前よりしも来たらず、かねて後に迫れり。
人皆死ある事を知りて、待つことしかも急ならざるに、覚えずして来る。（155段）

人は生まれた以上、「老・病・死」を避けることができず、必ず死を迎えることになり、大抵の場合、自分でも思ってもいないような形で訪れ、心の準備ができないうちに迎えることになり、それが世の習いと記しています。

確かに、死の多くは突然なものかもしれません。ただ　中には、本人も家族も十分に心の準備ができるケースもあるのではと思います。私の母は「もう十分生きた。ありがとう」と言って、最後を迎えました。先月お亡くなりになったKさんも、死出の衣裳まで自ら事前に準備され、安らかなお顔で旅たたれていかれました。

平均寿命が30半ばの徒然草の時代と違い、超長寿の現代。それなりに心の準備ができる時代になったのでしょうか。先月、女優の有馬稲子さんが日経新聞の「私の履歴書」を連載され、後半の段で、代々木のマンションを処分し、横浜の高齢者専用マンションを終の住処に決め、移りすんだ書かれていました。思い出深い持ち物を思い切って処分し、身一つで横浜に移られたとのこと。又有馬さんにとって人生最後の楽章の指針は、「夏羽織１枚を残して死ぬ」。つまり人の一生はほぼプラスマイナスゼロ、わずかに夏の羽織１枚を残す程度に終えることが理想と述べておられます。

又、別の意味でも。今回の有馬さんの「私の履歴書」は話題になりました。連載の中段（⑫～⑮）で、市川崑監督との不倫、中絶を告白されたことです。もっともこの話は15年前.有馬さんの自叙伝「バラと痛恨の日々」で暴露されてはいますが、60年弱時間が経過しても、2年前に監督が逝去されても、「身勝手さが今もって許せない」とのこと。私には、有馬稲子さんは荷物の整理は終わっても、心の準備がまだ終わっていないような気がします。

有馬稲子　略年表

本名:中西盛子(みつこ)
1932.年4月生　78歳
大阪府池田市出身
叔母(宝塚出身)に育てられ
S23 宝塚音楽学校入学
S26 映画出演
S36 中村錦之助と結婚
S38 舞台に進出
H７ 紫綬褒章受賞